

事業報告書

(平成13年4月1日から平成14年3月31日)

独立行政法人国立博物館

目 次

I 事業の概況

事業の経過および成果ならびに対処すべき課題

1. 全般的概況

2. 中期計画項目別事業実績

(1) 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

(2) 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

[東京国立博物館]

1 収集・保管

2 公衆への観覧

3 調査研究

4 教育普及

5 その他の入館者サービス

[京都国立博物館]

1 収集・保管

2 公衆への観覧

3 調査研究

4 教育普及

5 その他の入館者サービス

[奈良国立博物館]

1 収集・保管

2 公衆への観覧

3 調査研究

4 教育普及

5 その他の入館者サービス

[九州国立博物館（仮称）設立準備室]

1 新たな博物館運営への取り組み

(3) 予算

(4) 短期借入金の限度額

(5) 重要な財産の処分等に関する計画

(6) 剰余金の使途

施設・設備の整備に関する状況

事業成績及び財産の状況

II 国立博物館の概況（平成14年3月31日現在）

主要な事業内容

設置している博物館等

政府による出資の状況

主要な借入先

職員の状況
理事及び監事

Ⅲ 自己点検全体評価

I 事業の概況

事業の経過および成果ならびに対処すべき課題

1 全般的概況

(1) 組織体制の整備

平成13年4月1日、独立行政法人国立博物館（以下「国立博物館」という。）が誕生した。これを機に国民に質の高いサービスを提供すべく組織体制の整備を行った。

独立行政法人国立博物館本部事務局を新たに設置し、東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館の調整部署とした。

東京国立博物館では、展観・教育普及等の事業部門の充実、収蔵品の保存体制の確立のため、事務事業全般の見直しを行い、既存の学芸部・資料部の体制を、全く新たな企画部と学芸部とに改編した。

京都国立博物館では、展覧会、調査研究の企画機能向上、教育普及部門の充実、収蔵品の保存管理体制の確立のため、学芸課普及室を企画室と教育広報室に改編し、文化財管理官を新たに設置した。

奈良国立博物館では、教育普及部門の充実のため、学芸課に新たに教育室を設置し、管理課（現総務課）に所属していた学習普及専門官を教育室長とするとともに、国民への利用サービスの向上及び職員の意識改革を推進するため庶務係を総務・利用サービス推進係に改編した。

従前からの継続事業の推進に支障をきたすこともなく、また、新たな事業への取り組みも行うなど、組織体制の整備は実効があったものと言える。

(2) 事業の経過および成果

1 収集・保管

ア) 収集

東京国立博物館は、日本及びアジア諸地域にわたる、京都国立博物館は、平安時代からの京都文化を中心とする、奈良国立博物館は、仏教文化を中心とする、考古資料、古美術を中心として収集を行っている。

収集方法は、購入、寄贈、寄託の3形態である。購入については、3館ともに、研究員の調査研究、情報収集等により年度の収集方針に則り候補物件を選定し、更に内部の鑑査会で検討し、外部有識者等による買取協議会に諮問し、その議を経て購入物件を決定する。購入価格については、複数の外部委員による評価会の評価を得て決定する。

寄贈・寄託については、寄贈の申し出でや寄託の諒承を得られたものについて鑑査会で決定する。

平成13年度においては、国立博物館として、購入71件、寄贈149件、寄託品は新規164件を含む10,187件を収集した。特に寄贈については、東京国立博物館で、1名の篤志家から国宝1件（刀剣）、重要文化財3件（絵画）、重要美術品2件（絵画・漆工）を受贈したことが特筆される。

これら収集した文化財は、各館の展示・調査研究に活用するとともに、公私立博物館・美術館、海外の博物館・美術館への協力としての貸与、学術・教育等への協力としての特別観覧等に活用している。

イ) 保管

保管は、最も文化財の近くにいる研究者、保存科学の研究者、修理技術者との連携や収蔵庫及び展示場での保存環境の維持、更に施設・設備の質的向上・維持管理等が、有機的に繋がって行われることが望ましいが、こうしたシステムの取り組みの端緒に就きつつあるところが現状である。

こうした中で、緊急に修理が必要なもの、各館の修理計画に基づき修理を行うもの、展示計画に基づき修理が必要なもの等により、平成13年度においては、国立博物館で、157件の文化財の修理を実施した。今後の修理の研究資料（一種のカルテ）として修理報告書も刊行した。

長期的な修理計画を策定するために、1件ごとの保存状態を記録した保存カルテの作成に新たに着手した。

更に、収蔵庫や展示場の温湿度などの環境調査・分析も継続的に実施している。

2 公衆への観覧

ア) 常設展

平成13年度については、東京国立博物館は、総陳列件数9,981件、陳列替233回、京都国立博物館は、2,144件、陳列替63回、奈良国立博物館は、500件、陳列替6回によって常設展を構成した。

さらに、常設展を活性化するため、次のような取り組みを行った。東京国立博物館においては、新たに絵画・書跡の「国宝室」、工芸品に焦点をあてた「工芸至宝室」、新たな展示分野として歴史資料で構成する「資料展示室」を設置し、展示を行った。また、小テーマによる（例えば「馬具—鞍・鐙・轡」）特集陳列を23件行った。

その他、戦後、電力業界に大きな足跡を残した松永安左エ門が収集した茶道具を中心とした「松永耳庵コレクション展」は、福岡市美術館に寄贈されたものと合わせて展示し、松永コレクションの全容と意義が詳らかになり、好評を博した。

京都国立博物館では、時機に応じた企画、調査によって新たに見出された資料を加えた展観など7本の特集陳列を行った。その中で、「坂本龍馬－龍馬をとりまく人びと－」が新たに寄贈された「おりょう」の写真が公開されたことにより、好評を博した。

奈良国立博物館では、特集陳列よりも規模の大きな特別陳列を5件行った。恒例の「親と子のギャラリー」や、「岡寺の歴史と美術」等いずれも出陳品の質の高さに特色がある。

イ) 特別展・共催展

自主企画展である特別展とマスコミ等との共催展を実施している。いずれも2～3年の調査研究等の準備期間をかけて、その成果を世に問うているものである。

東京国立博物館では5件実施し、719,793人（目標56万人）の入場者を集めた。

京都国立博物館では4件実施し、220,456人（目標14万人）の入場者を集めた。

奈良国立博物館では2件実施し、191,002人（目標16万人）の入場者を集めた。

独立行政法人になっての新たな取り組みとして、3館ともに、自主企画展において広報の分野でマスコミとタイアップした。京都国立博物館では、入館者の便と広報効果を高めるため、特別展において新たに前売券を導入した。また、奈良国立博物館の正倉院展においては、例年問題となる券売所の混雑緩和を図るため新たに前売券を導入した。

ウ) 巡回展

国立博物館と独立行政法人国立美術館が所蔵している文化財・美術品を、公私立博物館・美術館において公開する地方巡回展である。

平成13年度においては、京都国立博物館が「かざりとかたち」のテーマで2館、奈良国立博物館が「信仰と美術」のテーマで2館において実施した。

エ) 海外展

日本の考古資料及び古美術を海外の博物館・美術館で公開し、日本文化への理解を深めてもらうとともに国際交流を図るものである。

東京国立博物館・京都国立博物館共催により、スイスで「長谷川等伯」展を、東京国立博物館がフランスで「はにわ展」を実施した。

オ) 海外交流展

海外における日本・東洋の美術に対する理解を相互に深めることを目的とするものである。

京都国立博物館とチェコ共和国プラハ国立美術館等との共催により、本年度は京都を会場に「プラハからの美のたより」展を実施した。

3 調査研究

ア) 調査研究の実施

諸々の博物館活動の基盤となるのが、調査研究である。

東京国立博物館においては、大別して 1 収蔵品にかかる調査研究（24件）、2 特別展のプロジェクトによる調査研究、3 科学研究費による調査研究（11件）、4 保存環境に関する調査研究、5 九州国立博物館（仮称）平常展示等にかかる調査研究を実施した。

京都国立博物館は、1 近畿地区社寺を中心とした文化財の総合調査研究、2 特別展にかかる調査研究、3 神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究、4 科学研究費による調査研究（6件）を実施した。

奈良国立博物館では、1 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究（2件）、2 海外所在日本文化財を対象とする調査研究、3 大和古代寺院出土遺物の調査研究、4 平成14年度開催の「東大寺展」の事前調査、5 仏教美術写真収集及びその調査研究、6 科学研究費による調査研究（3件）、7 韓国国立慶州博物館、中国上海博物館等との学術交流を実施した。

イ) 調査研究の成果の発表

調査研究の成果は、各館の紀要、各種調査研究報告書、学会発表、講演会、シンポジウム等により公開を行い、その成果を公表している。

4 教育普及

教育普及活動は、多岐に亘るので、詳細な報告は「2. 中期計画項目別実績」で報告することとし、新たな取り組みについてのみ、記述するものとする。

「教育」については、独立行政法人国立博物館法において新たに規定され、国立博物館の主要な活動に位置付けられた。

教育の取り組みとしては、児童・生徒を対象とした特別展等の展示を理解する一助としての児童向けワークショップの実施、こどもミュージアム（東京国立博物館）、親と子のギャラリー、親と子の文化財教室（奈良国立博物館）を実施、博物館ディクショナリー（京都国立博物館）の発行を行った。

小中学生については、平成14年度からの完全学校週五日制の実施を踏まえ、常設展の無料化を検討し、平成14年度から実施することとした。また、総合学習の時間を想定した体験学習を受け入れた。大学等との連携は、大学での学芸員資格取得のための博物館実習を受け入れ、京都国立博物館における京都大学大学院客員講座の運営や奈良国立博物館における奈良女子大学との連携講座を実施した。

2. 中期計画項目別事業実績

(1) 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

・東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の事務の見直しを行い、本部事務局を設置し、法人全般にかかる運営事務（理事会、外部評価等）、予算要求、資金運用及び損害保険その他共通的な契約等の事務を一元化し、本部事務局で一括処理を行った。共済事務についても一元化し、東京国立博物館の会計課で処理するなど効率化を図った。

・共通的な通知、事務連絡等は館内 LAN を十分に活用し、ペーパーレス化と効率化を図った。

・講堂等の利用についても、積極的に利用案内を行い、対外的な施設の有効利用を図った。

・運営委員会を設置し外部有識者へ法人の運営について諮り、事業等の推進に反映させた。

・職員についても、新たな企業会計の導入に伴い、会計事務に習熟させる為、機会を設け、研修を行った。

以上、法人としての自らの各方面の効率化を検討、実践しているところであり、今後とも、更なる効率化を図ることとする。

(2) 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

〔東京国立博物館〕

1 収集・保管

(1) 収集

彫刻、金工、漆工、染織、東洋漆工、東洋考古、東洋染織、民族資料の各分野から、陳列等に不可欠と考える文化財 29 件を購入した。

寄贈・寄託については、社寺・蒐集家を中心に継続して提供を働きかけた。その結果、寄託については、新規 32 件を加え、総計約 2,300 件を受け入れ、寄贈については、国宝 1 件（刀剣）、重要文化財 3 件（絵画）、重要美術品 2 件（絵画・漆工各 1 件）を含む、140 件余りを受贈した。

本年度の収集品は、いずれも、学識者や蒐集家等からも当該分野の欠落部分を補い、国民に広く公開するのにふさわしい文化財として高い評価を得ており、陳列品の充実に寄与するものである。

ただし、寄託については、その中から 20 件ほどが購入と寄贈の対象となったこともあり、前年度に比べて、総件数では 10 件余り減少し、寄贈・寄託の件数（計 2,434 件）においては、目標に 60 件ほど及ばなかったが、館のコレクションの充実を図ることができた。

(2) 保管

環境保存室と保存技術室からなる保存修復課を新たに設置し、4人のスタッフを配置し、保存体制の充実を図った。日本の博物館のなかでも画期的な取り組みである。

◎保存カルテ作成

収蔵品の保存状況（傷みの状況等）を知り、修理計画を策定するための保存カルテの作成に着手し約500件作成した。

今後は、安定的にカルテの蓄積を図るために作業手順の確立を目指すこととする。

◎保存環境調査

記録計を設置した箇所は収蔵庫と展示室を合わせて全館で約200箇所であり、データの採取は確実に実施することができた。それらのデータの解析によって、各施設における保存環境の特性を明らかにしていくことが可能になった。

(3) 修理

収蔵品の修理は予定の期間内に総ての作品の修理を完了し、次年度以降の陳列に供する事が可能となった。また、それに合わせて修理報告書の作成も完了した。

絵画・書跡の修理に関しては解体修理によって、裏打ちや表装の取り替えを実施したほか、考古金属遺物に関しては合成樹脂含浸による本体の強化処置、土器等に関しては解体修理によって土器片の最接合と欠失部位の充填、染織品に関しては解体によって破損部の補強などを実施した。

また土器、金属器、染織裂等の修理において断片が不適切な位置に接合された作品が数点存在することが判明し、今回の修理により正常と判断できる場所に戻した。

長期寄託品の修理については宗教法人観修寺所蔵「紙本著色観修寺縁起 1巻」の本格修理を、財団法人住友財団文化財維持・修復事業助成からの援助により、行うことができた。修理は2ヶ年継続の予定である。

こうした文化財修理データをデータベースとして有効に活用するために平成11年度、12年度合わせて281件の修理実績のデジタルデータ化を完了した。

2 公衆への観覧

(1) 展観

〔常設展〕

日本美術を展示する本館において、新たな取り組みとして著名作品を特化する方法として、国宝を常時展示する絵画国宝室、書跡国宝室、同じく工芸の名品を集めて展示する工芸至宝室を新設した。また、国際的関心に応えるため、浮世絵展示室を拡充し陳列ケースを額縁式に刷新した。さらに、従来展示する機会の少なかった近世、近代資料については、資料展示室を新設し、「資料が伝える江戸城」等特定のテーマを設定して常時展示することとした。

本年度において特記されるのは、特別展「松永耳庵コレクション」で、コレクションの歴史的意義を明確に提示し得たことは大きな成果と考えられる。

その他、東洋館、平成館、法隆寺宝物館、表慶館を活用した常設展示においては、種類別

の展示に加えて「中世・近世の経塚遺物」など、学術的意義等を考慮した特集陳列を積極的に実施した。

また、新収品展示の一環として開催した特集展示「日本の伝統工芸—人間国宝の技と美—」は、現代作品を展示したもので、東京国立博物館の展示作品の幅を拡充する新方針を反映させた。

〔特別展〕

1 「美術の中のこどもたち」

さまざまな時代とジャンルにわたって表現されている子供の姿を通じて、日本人にとって子供がどのような存在であったかを探求した。

北海道から九州にわたる各地から、縄文時代から近代にいたる各時代の関係作品を集め、(1) こどもの世界 (2) 成長するこども (3) 親の願い (4) 聖なるこどもの項目をもうけて系統的に展示した。また、展示内容を子供にも理解を深めることができるように、ワークショップ、関連講演会を開催し、広報拡充のためマスコミとの共催事業とした。

会期 平成13年10月2日(火)～平成13年11月11日(日)、陳列件数177件

入場者数44,993人(目標入場者数3万人) 共催 NHK・NHKプロモーション・東京新聞

2 「国宝 醍醐寺展 山からおりた本尊」

創建以来、1,100年余の歴史をもつ京都・醍醐寺が所蔵する平安から江戸時代にいたる仏教美術等の豊かさを、近年の調査研究の成果を踏まえ、真言密教寺院としての特色や、近世の豊臣秀吉による再興事業などを展示内容に反映させ、(1) 醍醐寺の仏教絵画、書跡、(2) 醍醐寺の近世絵画・工芸、(3) 醍醐寺を彩る人々、(4) 醍醐寺の仏像の4部構成とした。

会期平成13年4月3日(火)～平成13年5月13日(日)、陳列件数110件

入場者数195,611人(目標入場者数17万人) 共催 醍醐寺・日本経済新聞社

関連事業：能楽「菊慈童」、柴灯護摩、狂言「寝音曲」「六地藏」、醍醐寺の声名

3 「天神さまの美術」

日本の全国各地に広がる天神(菅原道真の御霊)信仰は、天神さまの名前で国民に親しまれており、関係する社寺等には膨大な文化財が蓄積されている。門外不出の秘宝を含め、新たな調査の成果も踏まえながら、(1) 道真公の遺品と生涯、(2) 天神縁起の諸相、(3) 天神の姿、(4) 天満宮の遺宝、(5) 祭礼と芸能、の5部構成で展示を行った。

会期 平成13年7月10日(火)～8月26日(日)、陳列件数132件

入場者数135,864人(目標入館者数16万人) 共催 NHK

関連事業：神職舞「桃李霞」、巫女舞「紅わらべ」、葛西囃子・葛西の里神楽「天孫降臨」、長唄「紅梅殿」、古式獅子舞

こどもミュージアム「天神さまってどんな人?」、ワークショップ「絵巻をつくろう」

「親子できさがそう!はくぶつかんたんけん:天神さま編」

4 「東京大学史料編纂所史料集発行100周年記念 時を超えて語るもの—史料と美術の名宝—」

東京大学史料編纂所と東京国立博物館の所蔵品を中心に、歴史のもつ意味や時代ごとの美意識の変遷などを日記や文書等の展示を中心に（１）公家日記の世界、（２）武家文書の世界、（３）鎖国と開国、（４）東京大学史料編纂所のあゆみ、（５）歴史学のデジタルアーカイブの５部構成で展示した。

会期 平成13年12月11日（火）～平成14年1月27日（日）、陳列件数162件

入場者数63,789人（目標5万人）共催 東京大学史料編纂所

関連事業：「香道に親しむ」

5 「横山大観 その心と芸術」

近代絵画史上に大きな足跡を残した横山大観の作品のうちから、2名の館外研究員の参画をもとめ、東京国立博物館の絵画研究者と共同で、横山大観の作品のうち53件を厳選した。多数の観客に大観芸術の価値の高さを再認識してもらった機会とした。

会期平成14年2月19日（火）～平成14年3月24日（日）、陳列件数53件

入場者数279,536人（目標入場者数15万人）共催 朝日新聞社

〔海外交流展〕

1 「長谷川等伯展」会場：スイス・リートベルグ美術館

桃山時代を代表する画家・長谷川等伯展の作品を展示し、その絵画的特色と日本絵画史上における位置を明らかにした。

会期平成13年6月16日～平成13年7月29日

共催リートベルグ美術館、京都国立博物館

2 「はにわ —悠久の守護者—V～VI世紀」会場：1. フランス・パリ日本文化会館、 2. イタリア・パラッツォ・デッレ・エスポジオーニ（ローマ）

近年、欧米においては、日本の縄文から古墳時代の美術への関心が高まっており、今回はそれを受けて古墳時代の「はにわ」に焦点を当てた展覧会を開催した。

なお、2. ローマ会場については、会場の都合により中止となった。

会期 1 平成13年10月2日～平成13年12月15日

2 平成14年1月15日～平成14年3月4日（中止）

共催国際交流基金

（2）収蔵品の貸与・特別観覧

国内外の172箇所の機関に対し、1,400件余りにのぼる文化財を貸与した。

特別観覧は、熟覧、撮影、模写・模造、写真原板使用等、2,700件余りを行った。

考古資料の相互貸借では9箇所の機関との間で、当館が収蔵する考古資料92件を貸与し、相手機関が収蔵する39件を借用した。

3 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

1 民俗資料調査

各課・室にわたって保管されている琉球関係資料の精査を実施し、その成果を、来年度早々、沖縄復帰30周年記念の5月に、久しく待望されていた『図版目録 琉球資料編』として公刊する準備を完了した。

2 歴史資料調査

旧資料部保管の歴史資料については、本年度、学芸部に新設された資料課歴史資料室の所管として、新体制のもとで調査研究を集中的に実施した。特に、近年内外において注目されている歴史資料であり、中期目標に掲げている館所蔵模写模本類による原品復元に関する調査研究対象の一つである幕末から明治にかけて撮影された写真資料について、外部の研究者も交えて調査研究を実施し、その成果を『幕末明治写真資料目録 3』として公刊した。その他、昨年度文化庁から管理換となった「宗家文書」（九州国立博物館（仮称）分）について、その内容を確認して総目録を作成した。また、旧資料部保管の歴史資料に関しては、科学研究費の研究成果公開促進費（データベース）を活用し、明治期の文化財調査報告書『宝物目録』に関する「宝物目録データベース」、明治から昭和初期に撮影された文化財を被写体としたガラス乾板に関する「貴重原版の文化財画像情報システム」、帝室博物館旧蔵書籍に関する「帝室博物館旧蔵書籍データベース」を実施し、それぞれ成果をあげている。

3 法隆寺献納宝物特別調査

法隆寺献納宝物特別調査を、本年度も、2月20日から2月22日まで、延べ21人の研究者によって実施した。本年度は、法隆寺献納宝物中の塔鏡・脚付鏡・蓋鏡・八重鏡等響銅製供養具を調査対象として実施し、肉眼観察はもとより実体顕微鏡・ガンマ線写真撮影等科学的調査、実測図の作成により、その詳細かつ具体的な基礎データをとりまとめ、同宝物の制作技法に関する新知見を得ることができた。その成果を『法隆寺献納宝物特別調査概報2 2計量器』として公刊した。

4 客員研究員等の外部研究者の招聘

客員研究員の制度を有効に活用して次の各分野18の研究テーマについて実施した。

1. 骨角貝器の研究（金子浩昌早稲田大学講師）、2. 中国地方の古墳出土金属器・石製品の研究（渡辺貞幸島根大学教授）、3. 瓦磚資料の研究（大脇潔近畿大学教授）、4. 法隆寺宝物室保管『古今目録抄』の研究（東野治之奈良大学教授）、5. 金石拓本の研究（柴田光彦跡見女子大学教授）、6. 本草書・博物書（江戸時代和書）の研究（磯野直秀慶応大学名誉教授）、7. 鉄鏡に関する研究（押元信幸東京芸術大学講師）、8. 浮世絵版画の研究（大久保純一国立歴史民俗博物館助教授）、9. 近世漆工芸のデザインに関する研究（日高薫国立歴史民俗博物館助手）、10. 近世小袖服飾及び芸能衣装の縫製染織技法に関する研究（水上嘉代子遠山記念

館学芸員)、11. 中国工芸品の研究(中野徹久保惣記念美術館長・黒川古文化研究所長)、12 中国北方系青銅器の研究(高浜秀金沢大学教授)、13 朝鮮半島出土瓦磚に関する研究(亀田修一岡山理科大学助教授)、14 東洋染織品に関する研究(小笠原小枝日本女子大学教授)、15. 古代エジプトの神像及び関係作品に関する研究(鈴木まどか比治山大学教授)、16. 当館保管の洋書及び関連資料の研究(松田清京都大学教授)、17. 日本近代美術工芸資料の研究(横溝廣子東京芸術大学美術館講師)、18. 石像彫刻の再修理と保存処置法に関する調査研究(藤原徹宮城県美術館学芸課副主任研究員)。

これらの調査研究の内、たとえば、骨角貝器の研究の成果は「東京国立博物館に収蔵する宮城県沼津貝塚出土の骨角製品について」(『MUSEUM』No. 573、2001年8月)に公表されており、また、瓦磚資料の研究については、本年度刊行した考古列品修理の詳細な報告書である『学術調査報告書 瓦塔・鴟尾』に、その成果が反映されており、その他のテーマについても、それぞれ今後の博物館における収集、保管、修理、展示や個別の図版目録、研究図録、修理報告書などに反映させることができるだけの成果をあげることが出来た。

客員研究員以外にも、当館の外国人招聘制度を活用し、中華人民共和国・湖北省博物館の李虹氏、中華民国・国立故宮博物院(台北)の林柏亭氏、韓国・湖巖美術館附設文化財保存研究所の韓鐘哲氏、カンボジア共和国・アプサラ委員会理事のアン・チュリアン氏、ロシア連邦・国立民族学博物館のヴァレンティナ・ゴルバチューヴァ氏、イギリス・大英博物館のロバート・ノックス氏を招聘し調査研究を実施したほか、他の研究機関の招聘により来日した多くの外国研究者の調査研究に協力し、国際学術交流の成果をあげることが出来た。

(2) 特別展のプロジェクトによる調査研究

本年度開催された特別展「国宝 醍醐寺展」、「天神さまの美術」、「美術の中のこどもたち」、「松永耳庵コレクション」、「時を超えて語るもの」、「横山大観展」、また海外で開催された特別展「長谷川等伯展」〔スイス・リートベルグ美術館〕、「はにわ展」〔フランス：パリ日本文化会館〕について、各特別展のプロジェクトチームの研究員が、それぞれ国内外の作品の調査研究を実施し、新資料の発見等の成果をあげ、その研究成果を展示とカタログに反映させた。その内容については、本評価フォーマットの「2. 公衆への観覧、特別展」に記述の通り。

(3) 科学研究費による調査研究

1 科学研究費による調査研究は、次の8件についての調査研究を実施した。

1. 「法隆寺献納宝物と正倉院宝物の源流に関する調査研究—韓国所在の彫刻・工芸作品を中心に—」は韓国の研究者との共同研究であり、韓国において国立中央博物館等の韓国所在の作品の調査研究を実施し国際学術交流の成果をあげることができた。2. 「日本出土原始古代繊維製品の集成及び基礎的研究」は日本で初めて全国的な資料集成をめざしたもので、宮崎県の古墳出土の直刀や鉄剣などの鉄器付着繊維製品をはじめ、韓国の現地調査等を実施しており、この分野の研究の基礎を築く成果をあげた。その他、3. 「日

本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」、4. 「中尊寺経軸端金具に関する基礎的調査研究」、5. 「埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究」、6. 「春秋戦国時代の青銅器の研究」、7. 「中国の書画印・鑑蔵印・落款に関する諸資料のデータベースとその総合的研究」、8. 「博物館資料の保存環境としての木質空間の特性」のテーマについても研究計画に基づく成果をそれぞれ出している。

また、当館の研究員が分担研究者として、1. 「中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の宗教彫像に関する調査研究」、2. 「敦煌写本の書誌に関する調査研究～三井文庫所蔵本を中心として～」、3. 「漢字文化圏における古写本の変遷と初期の印刷物に関する調査研究」の共同研究を実施した。

- 2 科学研究費以外の研究助成金による調査研究として、「中国・シルクロードにおける舍利荘嚴の形式変遷に関する調査研究—隋唐時代の棺形舍利容器と埋葬儀礼の関わりを中心に—」（財団法人なら・シルクロード博記念国際交流財団／シルクロード学研究センター）を実施した。この研究は、中国・日本の外部研究者を加えた共同研究であり、中国・新疆ウイグル自治区及び陝西省で関連資料に関する現地調査を実施し成果をあげている。

(4) 保存環境に関わる調査研究

- 1 環境保存室と保存技術室からなる保存修復課を新設し、研究体制の整備充実を図り、新体制のもとで、収蔵品の本格修理・応急修理や他館への貸与等に伴って行われる作品状態の点検作業を実施し、文化財保存カルテを約500件作成し、ほぼ本年度の目標を達成した。
- 2 中期目標に示した長期的な修理計画を策定するため、光学的調査によって得られた写真画像をデジタル化するシステムを開発することを目的とする研究の第一段階として、基礎的な文献資料の収集を行うとともに調査研究に必要な装置をポーラ美術振興財団の研究助成により導入し、本年度の計画を完了し、来年度以降の調査研究に向けての成果をあげることができた。

(5) 九州国立博物館（仮称）設立準備にかかる調査研究

九州国立博物館（仮称）の平常陳列の内容について、設立準備室のスタッフと意見交換を行い、それに係わる当館保管の全ての分野にわたる作品について、分野ごとに個別に共同の調査研究を実施し、必要な助言をした。この内、例えば、琉球関係展示に関する進貢船模型については、日本海事史学会などの外部有識者の参加を求めて調査プロジェクトを設置し、展示の具体的計画を検討するなど、各分野ごとに成果をあげており、来年度以降の基礎的作業を完了した。

4 教育普及

(1) 資料の収集と提供

館内で撮影された所蔵作品等の写真6, 190枚を整理・分類した。また、購入・寄贈・納本等により文化財に関する図書等を4, 732冊を収集・分類・整理した。また、これらを資料館で一般に公開した。

(2) 児童生徒を対象とした事業

こどもミュージアムにおいては、特別展「天神さまの美術」鑑賞の手助けとなるように菅原道真の一生をパネル展示で解説し、関連する美術作品も展示した。ワークショップにおいては、常設のワークショップ会場に多くの子供たちが訪れた。申込制で実施した「絵巻をつくろう」「親子でさがそう！博物館たんけん」は、特別展以外の展示を鑑賞するための動機付け及び鑑賞のヒントを提供することを目的とした。

同様に特別展「美術の中の子どもたち」では、美術作品に表現されている昔の遊びを体験するワークショップを実施した。また、来館した子供たちの美術学習の手助けとなる教育映画の上映も併せて実施した。

平成14年度から実施される新学習指導要領を先取りする形で、全国の中学校・高校から「総合的な学習の時間」の一環として当館において職場体験学習を実施したいとの要望に応えるため、インフォメーション業務を中心とした博物館業務を見学・体験するプログラムを実施した。

大学生を対象としたインターンシップでは、公募により3校、計3名の学生を受け入れ、職員とともに教育普及事業に関する業務に5日間に渡り従事させた。

(3) 講演会・友の会等

今年度は、記念講演会12回、月例講演会11回（うちテーマ別が3テーマ、8回）を開催し、延べ5, 179人（平均225人）が参加した。開催回数、参加者数が大幅に増加しただけでなく、また単に当館研究員の専門分野に関する講演会を羅列するだけでなく、テーマや内容に関連性を持たせ、講演会の意図するところを明確にし、目に見える形で教育普及事業の充実を図った。

また、列品解説は講演会とは趣向を変え、研究員が作品を前にして、来館者の身近で解説するもので、来館者と館員の交流が可能であり、来館者の評判もよく、回を追うごとに参加者が増えている。今年度は延べ43回開催し、2, 736人（平均64人）が参加した。

夏期講座は7月11日～13日まで3日間開催した。参加者は135人と目標を下回ったが、内容的には、日本美術史の観点だけでなく、西洋美術、東洋美術にみられる子供たちの姿を解説するとともに、社会学の観点からも「こども」という存在を分析・解説した。

友の会対象の講演会は「文化財の収集と登録—博物館の中で行われていること—」「博物館の展示をつくること—その裏側を語る—」の2回を開催した。

(4) 博物館・美術館関係者や修理技術関係者等を対象とした研修

今年度は推薦者が1名であったために、1名の受講を決定し、情報課において約6か月間

下記の研修を実施した。

- 1 情報システム運用・管理
- 2 画像データ蓄積戦略
- 3 マルチメディアコンテンツ作成におけるテキストデータ管理
- 4 博物館業務用ネットワーク設計
- 5 Linux導入

(5) 大学等との連携

東京女子大学、大正大学、多摩美術大学から各1名ずつ3名を受け入れ、講演会の実施補助、「松永耳庵コレクション展」における事前解説補助、裏庭ツアーの実施補助業務等を5日間実施した。

(6) 事業成果の広報活動

博物館ニュースの年間購読料を2,050円から2,080円（6冊分で2,500円）に若干価格を上げたが、内容のグレードアップとページ数の増加等について好評を得た。

特別展の展覧会図録については6冊刊行した。紀要、法隆寺献納宝物特別調査概報、修理報告書については計画どおり刊行されたが、図版目録については原稿作成中に、研究上の必要から予想外の時間を費やし印刷・刊行までには至らなかった。

(7) 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報のデジタル化

・画像については目標の倍、文字についても目標を大きく上回る数量のデジタル化を達成し、収蔵品等の情報の蓄積が推進された。

・講演会等教育普及事業の広報については、博物館ニュース及び実際に来館した観覧者への掲示等が広報の中心であったが、今年度は積極的にホームページを活用して広報した。

館内に「国立博物館所蔵国宝高精彩画像閲覧システム（e-国宝）」を設置し、来館者が端末を操作して自由に利用できるようにしたことにより、展示室で常時見ることのできない国宝についても、来館者が身近に感じられることを可能とした。また、システムを利用して、国宝一覧を検索し、個別作品のページに進み、そのページで代表画像、基本データ、さらに大きな画像が見られるなど来館者の用途に応じた利用を可能とし、来館者の国立博物館所蔵の国宝に対する理解と関心を促進した。

当館所蔵の文化財のデジタル画像（一部写真原板・焼付を含む）を、その目的に応じて広く一般に利用してもらうため、「TNM Image Archives」開設のための検討を行い、平成14年4月実施の予定となった。

(8) ボランティアの活用

今年度のボランティア事業については、インフォメーション、講演会、列品解説の実施補助等に加え、「松永耳庵コレクション展」においてボランティアによるガイダンス及び裏庭見学ツアーや館内の樹木を紹介する樹木鑑賞ツアーを実施した。教育普及ボランティアが来

館者と接する機会が拡大しボランティアの満足度や充実度も増している。

受け入れ人数も90名から119名に増加し、上記事業を実施するための研修も充実させた。

(9) 企業との連携

当館所蔵の文化財のデジタル画像（一部写真原板、焼付を含む）を、その目的に応じて広く一般に利用してもらうため、「TNM Image Archives」開設のための検討を行い、平成14年4月実施の予定となった。

5 その他の入館者サービス

特別展において音声ガイドを作成し、来館者の作品に対する理解を促進し、来館者サービスの充実に寄与した。さらに、特別展「美術の中のこどもたち」では、ドラマ風に仕立てた子供用の音声ガイドを作成し、子供の展覧会及び作品の理解に貢献した。

〔京都国立博物館〕

1 収集・保管

(1) 収集

室町水墨画として狩野元信筆「真山水図」、近代障壁画として「洛中洛外図屏風」など、京都所在の博物館として、ともに欠かすことができない主題及び制作者の絵画の優品を購入でき、このほか中国絵画、古文書、仏具、陶磁器等を加えた多岐にわたる文化財が収集できた。特に洛中洛外図は、かつて当館敷地内で実施した発掘調査によって遺跡の現存が確認された、桃山時代の方広寺（大仏殿）南大門へ通じる古道を描いた希少な絵画資料である。

各分野にわたって積極的に寄託を受け、重要文化財9件、重要美術品1件を含む88件の寄託品を得た。一方所蔵者の都合により、やむを得ず返還した文化財もあったが、目標とした6,000件を維持している。

(2) 保管

収蔵庫2,018㎡を平成14年3月末に完成した。

この新収蔵庫には、屋外環境条件に影響されないよう、外壁は外壁鋼板に断熱材を打ち込んだサンドイッチパネルとし、内壁は木質系の調湿板を打ち込んだ天然木積層板仕上げとしている。また、空調設備においては、収蔵品の分野に応じて、年間を通じ最適の温湿度条件を保てるよう各室ごとの条件設定を可能とする設備としている。

(3) 修理

前年度に寄贈を受けた文化財のうち、損傷が甚だしいものがあつたので、優先的に修理することとし、従来から計画されていたものを加え、今年度の修理目標件数（8件）を上回る12件の文化財の修理を実施した。また、染織品の修理実施に際しては、修理に用い

る裂地や染織技法を作品制作当時のものに合わせるための選定について指導し、また脆弱となった部分の補強の縫の位置や密度について綿密な調査に基づいた助言を行った。

文化財修理等のデータベース化については、既存のシステムは、入力等に時間が相当かかり非効率なものであったため、システムの一斉（ハードの更新とソフトの改良）を図り、効率的な作業ができるよう改善した。この改善により、今年度は目標の200件を上回る266件（新規分166件、遡及分100件）を入力することができた。

文化財保存修理所の修理環境の向上のため、施設の一部改修（屋上防水、窓枠の取替え）を実施した。また、環境モニター箇所を増やし、監視を強化した。

文化財の修理に当たっては、継続して外部からの修理技術者を受け入れ、修理技術の向上に寄与した。

国内文化財修理件数 161件（5,047点）

国外文化財修理件数 5件（5点）

2 公衆への観覧

（1）展観

〔常設展〕

1 特別陳列「新収品展 I」

平成13年6月27日～平成13年7月29日

前年度に購入、寄贈等によって当館の所蔵となった文化財を公開した。

2 特別陳列「坂本龍馬—龍馬をとりまく人びと—」

平成13年8月1日～平成13年9月2日

重要文化財に指定されている当館所蔵の坂本龍馬関係史料を核にした恒例の特別陳列である。今年度は新たに寄託を受けた井口家アルバム（幕末維新時代の人物写真帳）を中心に龍馬をめぐる人物に重点をおき、同時にアルバム編集者であった中井弘（のちに京都府知事となる）の関連資料にもスポットをあてた。

3 特別展観「智積院の名宝」

平成13年9月26日～平成13年10月28日

真言宗智山派の本山智積院が京都東山の地に再興されて400年目に当たるのを記念して、同院所蔵の文化財を公開した。

文化財総合調査を踏まえ、智積院の全体像を明確に提示出来た展覧会として意義の深いものであった。また、智積院は当館に隣接しており、観光寺院として公開されているが、寺では見ることのできない様々な文化財を公開したことで、寺院拝観の途次立ち寄る観光客も見られた。

4 特別陳列「新収品展 II」

平成13年10月31日～平成13年12月2日

外交官であった須磨弥吉郎氏が収集し、子息の須磨未千秋氏より寄贈を受けた（一部購入）中国美術を公開した。

須磨コレクションは我が国における中国近代美術の最大のコレクションであり、これらの作品には、円山応挙に始まる京都画壇の影響をうけたものや、京都で活躍した最後の文人画家富岡鉄斎との思想的、技法的交流を窺わせるものがあり、京都文化の近代的展開や国際的広がりを示す資料である。

5 特別陳列「獅子・狛犬」

平成14年1月4日～平成14年3月24日

単に狛犬と呼ばれていたものが獅子と狛犬のセットであるという知識を定着させることとして正月の恒例企画として実施した。

桃山から江戸時代の作例を加えたことにより、近世の彫刻作品は、鎌倉時代の仏師の作例を学んだものであることがよく理解できる展示であったと評価される。

6 特別陳列「奈良朝写経」

平成14年2月6日～平成14年3月10日

当館に所蔵される上野コレクションを中心に、寄託の古写経を加えて、写経として最も水準の高い奈良朝写経にスポットを当てた。

これらの経典の文字の美しさを鑑賞・理解する為に国宝4件、重文15件、重美4件をはじめとした30件を展示した。

展示作品が概観できるように目録を兼ねた簡単なリーフレットを作成し、会期中に行った土曜講座も好評を博した。

7 特別陳列「雛まつりとお人形」

平成14年2月15日～平成14年3月31日

3月3日の上巳の節句にあわせて、段飾りをはじめ近世、近代の雛人形と、御所・賀茂・伏見など、京都の様々な人形を展示紹介した。

〔特別展〕

1 北野天満宮神宝展

本年が祭神菅原道真の1,100祭に当たるのを記念し、当館が平成9年度に実施した北野天満宮所蔵文化財の総合調査の成果をふまえ、同社の神宝を総合的に紹介した。

会期 平成13年4月10日～平成13年5月13日、陳列件数132件

入場者数31,273人（目標入場者数5万人）

共催：北野天満宮、京都新聞社

2 ヒューマン・イメージ —われわれは人間をどのように表現してきたのか—

日本の美術において重要な主題である「人」を採り上げ、単なる人のかたちだけでなく、

その精神性にも注目して、人間存在のあり方を総合的に照射した。

会期 平成13年10月23日～11月25日、陳列件数123件

入場者数27,210人(目標入館者数3万人)

共催：朝日新聞社

3 雪舟

日本を代表する画家として広く知られる雪舟を、没後500年を機にその作品を網羅的に収集し、前身とされる拙宗の作品、師や弟子の作品をあわせ展示したことで雪舟が浮かび上がっていることなど、評価が高かった。

会期 平成14年3月12日～平成14年4月7日、陳列件数152件

入場者数142,675人(平成13年度分、目標入館者数6万人)

共催：毎日新聞社

[海外交流展]

「長谷川等伯」展では海外における日本美術への、また「プラハからの美のたより」展では我が国での在外美術に対する関心を喚起したものと考ええる。

1 長谷川等伯展

平成13年6月17日～平成13年7月29日

スイス連邦チューリヒ市のリートベルグ美術館と連携し、同館に於いて桃山時代の巨匠長谷川等伯の主要作品を紹介した。

2 プラハからの美のたより

平成14年1月12日～平成14年2月17日

チェコ共和国プラハ国立美術館・ナープルステク博物館と提携し、当館を会場として、同館に所蔵される日本美術のうち、浮世絵を中心とする近世絵画と陶磁器に絞って紹介した。

[巡回展]

「かざりとかたち」というテーマにより、鹿児島県歴史資料センター黎明館(10月6日～11月4日)、沖縄県立博物館(11月13日～12月9日)で開催した。

国宝・重要文化財を含む名品の鑑賞が少ない両地域での開催が、大きな期待をもって受け入れられた。入場者数は、鹿児島県立歴史資料センター黎明館5,725人、沖縄県立博物館6,927人。

(2) 収蔵品の貸与・特別観覧

基本的に国内外の博物館、美術館の要請によって貸与を行っているが、企画の中で収蔵品の貸与件数はほぼ昨年並みであるが、指定文化財の貸与件数が約4割(113件)を占めた。また、特別観覧は昨年より大幅な伸びを示した。特に、カラー原板の充実により出版物関係への掲載によるものが増えた。

3 調査研究

(1) 調査研究

1 近畿の社寺を中心に、京都文化に関する文化財の総合調査という計画に基づき、建仁寺及び八坂神社の所蔵文化財を調査した。

また、今年度で13年目となる中尊寺経に関する調査を「平安後期の装飾経の調査(科学研究費)」として実施した。

両足院の社寺調査は、5月7～11日の一週間、当館の全分野の学芸員により悉皆調査として実施した。従来知られる文化財のほか、各分野で新出資料がみられた。なかでも金有声など朝鮮時代の絵画、柿本人麻呂像などの中世詩画軸、仁阿弥道八の京焼などが注目され、また寺院経済や檀越との関係を示す文書群も今回はじめて本格的調査のなされたものである。また、今年度で13年目となる中尊寺経に関する調査を「平安後期の装飾経の調査(科学研究費)」として実施した。

中尊寺経調査は8月に延べ28人の学芸員が高野山宝物館に出向き調査を実施し、紺紙の経典の裏に墨書(仮名消息)があることなど、新たな発見があった。また、約600カットに及ぶ写真撮影を実施し、中尊寺経に関する基本データを大きく増すことができた。

2 特別展の出品候補作品の選定と学術的位置づけのための調査

平成14年度春の特別展覧会「建仁寺」展のための調査には、延べ40人の学芸員が参加した。この調査では、取得できた文化財に関する新たなデータ約300点、写真約400カットを収集できた。

3 神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究

本調査研究は、仏教美術をテーマとする基本的な研究資料の蒐集と研究会の開催を行うこととして、平成12年度より6ヵ年計画で実施している。今年度はその第2年目として「院政期の作善と美術」をテーマに研究発表と座談会を実施、またその報告書を刊行した。更に蒐集した未刊行図像類のうちから重要な資料を図像蒐成「VIII」として刊行した。

4 客員研究員との調査研究

奥平、藤岡両研究員からは、特別展覧会「ヒューマン・イメージ」の企画において、絵画、彫刻のそれぞれの分野での作品選定や展示構成等について専門的見地からの意見を得た。

山田研究員からは、当館が計画している文化財情報システムの新OS移行にあたって会議等において、合理的なシステム構築のために指導助言を得た。

(2) 調査研究の成果に係る発表

1 仏教美術に関するシンポジウムの開催と報告書の刊行

開催月日 平成13年11月5日

パネリスト 泉 武夫(京博)、山本 勉(東博)、阿部泰即氏(名大)

仏教美術のシンポジウムは64名の参加者を得て、充実した研究発表、活発な討論が行われた。また、シンポジウムの報告書を刊行した。

2 特別展覧会「ヒューマン・イメージ」に関する国際シンポジウムの開催

開催月日 平成13年11月10日

パネリスト 立花 隆氏 他

国際シンポジウムは229名の参加者があり、盛会であった。また、講演、研究発表においても国内外から専門家を招聘し、貴重な討論がなされた。

3 前年度に開催した特別展覧会「若冲」に関する研究図録の刊行

平成12年度秋期に実施した特別展覧会に係る学術図書として編集刊行するものであるが、展覧会を受けて若冲の作品ではないかと思われるものが多数発見され、その調査に時間を要しているため編集作業が若干遅れているが、次年度早期に刊行する。

4 館職員・客員研究員等の研究成果の発表

研究紀要「学叢」については、論文4本、研究ノート1本、研究随想1本、修復文化財関係銘文集成1本を収録するための編集作業中であり、次年度5月中旬には刊行する。

5 社寺調査の成果報告

建仁寺における文化財調査報告の編集

今年度は、平成12年度に実施した建仁寺・霊洞院の調査報告を刊行予定であったが、霊洞院の陶磁器類を完全収録するための補足調査が未了であったこと、また4カ年計画の建仁寺及び塔頭寺院の報告書を統一した様式にするため、今年度調査の状況を見極める必要があったこと等で、編集作業が若干遅れているが、データの入力作業は進行しており、次年度早期に刊行する。

6 文化財修理報告書の刊行

最終に完了した修理分が年度末であったため、修理資料の入手が遅れ現在編集作業中であるが、次年度早期に刊行する。

4 教育普及

(1) 資料の収集と提供

ホームページコンテンツの工夫によりアクセス件数は大幅に増え、多くの人に利用されたと考える。またデジタル化については、国宝、重文以外の収蔵品や研究資料のデジタル化に取り組み、収蔵品や文化財関係資料の幅広い情報提供が図れつつある。

(2) 児童生徒を対象とした事業

新館平常陳列において展示中の作品から小中学生に興味を持ってもらえそうな作品を選び、博物館ディクショナリーとして年7回、毎回1,500枚を発行した。

(3) 講演会・友の会等

土曜講座では、テーマを特別展に関連したもの等、変化を持たせながら47回実施した。聴講者の総計は4,601名。1回あたり聴講者数の最高は275名。

夏期講座は今年度は「祈りの造形」をテーマに7月25・26・27日に実施し、申込者は112名で、うち受講者は99名。

今年度からは独立行政法人化を機に、友の会入会希望者の利便性を図れるよう従来の年1回限定入会方法から、随時入会方法に改変した。本年度の会員数は1,761名となった。

(4) 博物館・美術館関係者や修理技術関係者等を対象とした研修

国宝、修理装こう師連盟定期研修会に施設や文化財資料の提供、技術的指導を行い修理技術関係者等研修に重要な役割を担った。

文化庁の指定文化財企画展示セミナーには当館学芸員を講師に派遣することで文化財に係る知識の教示並びに資料の提供等を行い公私立博物館等への支援を行った。

(5) 大学等との連携

(京都大学人間・環境学研究科の客員講座の運営)

担当教官6名、所属学生3名。所属学生以外にも研究科に所属する京大院生が数名規模で各講座を受講。講義は原則として館内で、展示品・収蔵品を前に行った。

学芸員実習については、21大学・44名を受け入れた。ほぼ例年通りの規模である。数名单位の小分けにし、学芸課各部署で6月末から9月にかけて受け入れた。館蔵品の整理作業等に從事してもらいながら、博物館の活動状況を実地で説明した。現場での体験は参加した学生には好評であった。学芸員を志望する層に当館を例に博物館の現状と問題点を前もって理解してもらうことは、大観的な見地に立てば意義のあることである。

(6) 事業成果の広報活動

1 展示・展覧会情報「京都国立博物館だより」を10,000部、4回発行し、館内に設置、無料配布した。この「だより」は四半期ごとに発行し、その期間中の館事業や展示作品の解説を掲載している。

2 外国人の観覧者のために(京都国立博物館だよりの英語版)「KYOTO NATIONAL MUSEUM NEWSLETTER」を3,000部、4回発行し、館内に設置、無料配布した。

3 京博の歴史・展示施設及び事業内容等を紹介した展示案内リーフレット（日本語版・英語版）を日本語版は100,000部、英語版は30,000部を発行し、館内設置、無料配布した。見やすく軽便なため、来館者には好評であった。

4 ホームページへのアクセス件数をコンテンツ充実度のひとつの指標とみなした場合、平成13年度は34万5696件であった。

5 デジタル化件数については、文化財情報具備の画像について249件を入力した。また単純情報のみ付属の画像デジタル化終了件数がほかに1,280件あり、これとは別に文部科学省助成の科学研究費による中尊寺経関係の画像デジタル化件数3,000件を加えることができた。

(7) ボランティアの活用

（京都橘女子大学との学術交流と教育提携による解説ボランティアの実施）

参加学生は16名（4回生：7名、3回生：9名）で、平成13年10月23日から11月23日の期間に、毎週火・水・金曜日の午後1時30分からと3時からの2回、新館1階の考古・陶磁・彫刻の各展示室を解説した。

5 その他の入館者サービス

1 アンケートや聞き取り調査の中で、意見が多かったバリアフリーの改善として、身体障害者優先駐車場（3台）、身体障害者及び乳児同伴トイレ（1カ所）を新設した。また展示場（本館）への身体障害者通路を改修し、高齢者、身障者等の施設利用への改善ができた。

2 館内のサインを一新し、見やすく丁寧な案内表示に改善し、常設展示には、ロビーの椅子を増設し、また、特別展では休憩場所をできるだけ多く設けるよう心掛けた。

3 入館者の意見を多く得るためアンケート内容（記述方式を少なくし、選択方式項目を増す。）及び記入場所の改善を図った。この改善により多くの貴重なアンケートが得られ、展示等事業運営に反映できた。また、特別展においては企画段階から専門家（調査員等）の意見を聴取し、展示の充実を図った。

4 解説は、作品の名称、年代等の形式的な記述から、作品が生まれた背景等、観覧者がより深く作品を楽しめるよう工夫した。また音声ガイドを導入し、より詳細に解説できるよう改善した。この音声ガイドでは、多くの利用者があり、好評であった。（雪舟展約8人に1人が利用）

5 入館者へのサービスの充実として、雪舟展では入館状況に応じ、開館時間の繰り上げ（9

時30分開館をその日の状況により早める)、また、閉館時間を延長する対応を図った。

6 今年度ミュージアムショップでは売場面積を拡大し、専門図書から修学旅行生等低学年層が求め易いグッズ等、販売品を幅広くすることに協力を得た。レストランにおいては、メニューを増すとともに館刊行の図書が飲食しながら閲覧できるよう図書コーナーを設置した。また、特別展と入館者が増える期間は庭園内に臨時の飲物自動販売機を設置した。入館者が文化財の観賞以外でも、快適な時間を過ごせるよう館内環境の改善に努めた。

〔奈良国立博物館〕

1 収集・保管

(1) 収集

・購入については、彫刻1件、絵画2件、工芸2件、書跡3件の合計8件を購入した。「絹本着色釈迦霊鷲山説法図」「銅造大威徳明王騎牛像」「悉曇藏」「獅子座火焰宝珠形舍利容器」など、いずれも文化財としてきわめて価値の高いものばかりである。

・寄託については、薬師寺(奈良市)所蔵の10件(内重要文化財2件で、内訳は彫刻3件、工芸3件、書跡3件、考古1件)、峰定寺(京都市)所蔵の工芸1件、手向山八幡宮(奈良市)所蔵の5件(うち重要文化財3件・内訳は、彫刻3件、工芸2件)、中宮寺(生駒郡斑鳩町)所蔵の考古7件、奈良市所蔵の絵画1件、高浜市やきもの里かわら美術館から8件、その他考古12件合わせて44件の寄託を得た。

・寄贈については、平成14年3月開催の鑑査会を経て、個人コレクターから寄贈の申し出のある、中国青銅器356件について、受託することとし、今後手続きを進めることとした。

・借用について、収蔵品の収集費用の不足を補い、当館の陳列品に大きな厚みを出すため、文化庁が購入した文化財「絹本着色熊野曼陀羅」について、平成14年度に貸与を受け、陳列に活用する。これは、独立行政法人化後の新たな方法として位置付けられる。

(2) 保管

・収蔵庫及び展示室の温湿度管理については、年間を通じて温度22～25℃、相対湿度60%に設定し24時間空調を行っており、今後とも現今と同様の方法で実施する。

・展示館である西新館の空調設備については耐用年数が来ており、取り替え工事に着手した。

・絵画35件、彫刻35件について特別展及び常設展の展示の際に調査を実施し、将来の保存修理のための基礎資料とした。全体に保存状況は良好であり、温湿度の変化等による劣化や、虫損等の被害は観察できなかった。

(3) 修理

・館蔵品の内、書跡2件(1件継続、1件新規)、彫刻2件、工芸1件、考古資料3件(以上新規)の計8件の修理を実施した。

・長期寄託品については、民間財団の助成を得て、毎年1件程度の修理を実施し、平成13年度は彫刻1件を修理した。

2 公衆への観覧

(1) 展観

〔常設展〕

常設展では、仏教美術を中心に、延べ約500件の文化財を展示した。とくに本館における彫刻部門の展示は、インド・西域・中国・韓国の仏像及び、飛鳥時代より鎌倉・室町時代にいたる我が国の仏教彫刻の様式的変遷を質の高い文化財で表現した。

1 親と子のギャラリー「絵巻にしたしむ」では、主として小学生の児童およびその保護者を対象として、美術品に対する親しみを増してもらおう試みをおこなった。今回は絵巻物を対象とした企画であり展示品は絵画10件、経典等10件の計20件（うち国宝9件、重要文化財8件）とした。特に展示とカタログの作成に留意し、解説をやさしくわかりやすくするように努めた。入場者総数は32,773人。

2 特別陳列「岡寺の歴史と美術」は、近年、五百数十年の時を経て再建された三重塔の壁画完成を契機として、奈良時代以来の法灯を現在に伝える明日香・岡寺の寺宝及び関連文化財を一堂に会したもの。展示品は絵画・彫刻・工芸・書跡・考古・歴史資料の計35件（うち国宝1件、重要文化財6件）である。会期は平成13年9月18日～10月8日。入場者総数は、12,116人。

3 特別陳列「西大寺 興正菩薩叡尊 1201-91—民衆を救った生き仏—」は、奈良・西大寺を中興した興正菩薩叡尊の生誕800年を記念して、西大寺では多くの記念事業が行われたが、特別陳列もそれに因んで開催した。特に叡尊の生涯に焦点を当てて、舍利信仰、釈迦信仰、貧民救済など活動の特色を浮彫りにした。西大寺本尊である木造釈迦如来立像(重要文化財)や木造叡尊像（重要文化財）も、借用し展示することができ、内容的にはきわめて高度のものとなった。会期は平成13年12月1日～12月24日。入場者数は、8,348人。

4 特別陳列「大和の神々と美術—手向山八幡宮と手搔会—」では、東大寺の鎮守である手向山八幡宮をとりあげた。本展は、手搔会を形成する文化財を一堂に展観した。鎌倉時代の貴重な神輿も出品され、充実した内容となった。会期は平成14年1月4日～2月3日。入場者数は、7,769人。

5 特別陳列「お水取り」は、奈良・東大寺の毎年恒例の行事であるお水取りに因んだもの。当館でも特別陳列を初めて既に6回目となる。今年は五体板を展示、また大導師部屋を再現し、さらに写真パネルも多数活用して、より身近にお水取りを感じていただくこととした。

会期は平成14年2月19日～3月17日。入館者数は、13,950人。

常設展の入館者数は、特別陳列を含め133,048人となった。

〔特別展〕

1 「仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―」

我が国で受容された仏舎利に対する信仰の変遷をたどり、舎利信仰に加えて、真言密教請来とともに宝珠に対する信仰が盛行するにいたる過程を追った。

会期 平成13年7月14日～平成13年9月2日、陳列件数142件

入場者数25,000人（目標入場者数4万人）

2 第53回「正倉院展」

鈴鐸類10点など初出陳の宝物が例年に比して多かったこと、前売り券を販売し、またマスコミの協力を得て、広報を充実をしたことや、開館・閉館時間を拡大し、より多くの人に観覧いただけるよう工夫したことが、リピーターの多い「正倉院展」愛好家の好評を博した。

会期 平成13年10月27日～11月12日、陳列件数75点

入場者数166,002人（目標入場者数12万人）

〔海外交流展〕

・平成15～16年度に計画されている韓国国立慶州博物館との交流展の準備のために、当館と慶州博物館の研究員を各2名1ヶ月程度、先方に派遣し、先方からも2名の研究員を受け入れた。

・ニューヨーク市のジャパンソサエティーで計画されている「日韓古代仏教文化交流展」の開催準備のためのシンポジウム及び事務打ち合わせのために、当館から先方に研究員1名を短期派遣した。また、韓国における担当館である国立慶州博物館に当館館長及び学芸課長が出張し会議を持つなど、具体的な準備を進めた。

・中国北京歴史博物館との交流展の実現のために、学術交流協定の締結の準備を進めている。

以上のほかにも、米国サンフランシスコ・アジア美術館からは、先方の展覧会への協力を要請されており、日本国内における、出品交渉や文化財の集荷・梱包・輸出・展示などを担当すべき協定を結んだ。

〔巡回展〕

「信仰と美術」

「信仰と美術」をテーマに、国立国際美術館と共同で実施。「古代の信仰と美術」及び「近代美術と信仰」の2部構成として68件を出品し、会期中に各会場で講演会を1回開催した。

1 和歌山県立博物館

会期 14年1月12日～2月11日

入場者数 3,668人

2 徳島県立博物館

会期 14年2月19日～3月21日

入場者数 4,303人

(2)収蔵品の貸与・特別観覧

- ・近年増加の一途をたどっている列品の貸与申請について、文化財の保護や当館の展示計画との兼ね合いに充分配慮しつつ、列品貸与の申請に対応した。貸与件数は103件である。
- ・特別観覧件数は、354件である。
- ・文化庁海外展 大英博物館「神道展」に、館蔵品・寄託品から合わせて7件を貸与した。

3 調査研究

(1)調査研究

- 1「南都諸社寺等に関する計画的な調査研究」のうち、手向山八幡宮における文化財調査の成果は当該特別陳列「手向山八幡宮と手搔会」に反映された。
- 2「海外所在日本文化財を対象とする調査研究」は、ドイツ・リンデン美術館における日本美術品について実施している3年計画の研究の最終年度であり、成果を取りまとめた。
- 3「大和古代寺院出土遺物の研究」は、帝塚山大学考古学研究所との共同研究であり、斑鳩地区発掘の古瓦に関する調査研究を行い、既に資料等を大学に一部移し、実測図等の製作を行っている。
- 4 東大寺及び石山寺における調査を、平成14年度における各々の展覧会にその成果を反映することとし、実施した。
- 5「仏教美術写真収集及びその調査研究」は、特に特別展「仏舎利と宝珠」において借用した文化財を中心に写真撮影を実施し、成果を資料管理研究室において整理保管した。
- 6 科学研究費補助金による「日本上代における仏像の荘嚴に関する研究」では聖林寺十一面観音像光背復元図を提示することが目的の一つであり、研究は順調に進んでいる。さらに東大寺二月堂観音像光背の表裏の図様の描起こし図を作成した。
また、「上代仏像荘嚴にかかわる研究発表と討論会」を平成14年2月23日に開催し、国内外から約40人の第一線の研究者が集まった。北京大学馬世長教授、青山学院大学浅井和春教授、東京国立博物館加島勝金工室長氏、神戸大学黒田龍二助教授の発表と韓国・弘益大學校金理那教授及び韓国美術研究所鄭于澤副所長の参加も得て意見交換を行った。
- 7 科学研究費補助金による「X線透過撮影法による中国請来木彫仏像の調査研究」は、中

国請来仏と関係の深い、日本禅宗彫刻を集中的に調査し、石川県永光寺所蔵の木彫11体のX線撮影を実施した。また、兵庫県中山寺の十一面観音像の調査を実施し、納入品を発見するなどの成果をあげた。

8「古代鉛釉陶器の日韓比較研究」では、韓国の国立慶州博物館、国立公州博物館、国立全州博物館に所蔵される鉛釉陶器関係資料を実査した。その結果、従来知られていた新羅系の鉛釉陶器に加えて百済系の釉陶器の大枠を把握することができ、日本における三彩陶器の成立過程を推測することが可能となり、大きな成果を得た。

9「韓国国立慶州博物館、中国上海博物館等との学術交流」では、韓国国立慶州博物館とは海外交換展を計画しており、そのために相互の研究員の交換研究を行っている。特に、招聘した研究員の朴氏と金氏は、先方の中堅研究員であり、今後の相互の協力発展のためにきわめて有効な役割を果たすと期待される。当館から派遣した研究員も相当の成果を上げており、今後の専門の研究に際して有意義な効果をもたらすものと期待される。また、中国上海博物館と平成12年度末には「日本文物精華展」を先方で開催するなど、一定の成果を上げてきており、引き続き相互訪問を継続し、より一層の交流を深め、館員の資質向上に役立てることができた。

10 客員研究員等の調査研究

中国・北京歴史博物館館長の朱鳳瀚氏を文化庁主催「外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」で招聘し、特に当館が預かっている300点強の中国青銅器について実物調査を行い、明快な学問的評価が得られ、また北京歴史博物館と当館との学術交流及び展覧会交流の話 題が真剣に検討された。平成14年3月には、朱鳳瀚館長を再度招聘し、当館が受贈を検討している、中国青銅器コレクションについての調査及び意見交換を行った。

また、今後の日米の学術交流の担い手の一人として期待されるハーバード大学サクラ一美術館のアンローズ・北川氏を文化庁主催「海外の博物館美術館の学芸員の招へい事業」で招聘し、当館をはじめ、東京国立博物館、京都国立博物館でも研究交流を深めた。

客員研究員については、松本包夫氏（元宮内庁正倉院事務所保存課長・工芸史専攻）は、収蔵品のうち染織品の保存状況の調査研究を実施した。中野玄三氏（元嵯峨美術短期大学長・仏教絵画専攻）は仏教絵画の保存状況の調査研究を実施した。森郁夫氏（帝塚山大学教授・考古学専攻）は、収蔵品のうちの古瓦、就中斑鳩地区出土の古瓦について調査研究を実施した。これらの客員研究員により、当館研究員でカバーできない専門分野等の調査研究が実施でき、その成果は館蔵品図版目録の刊行などに反映された。

(2) 調査研究の成果に係る発表

1『鹿園雑集』第4号を刊行した。内容は論文1本、研究ノート2本、資料紹介2本、修理報告1本である。

2 ドイツ・リンデン美術館所蔵日本美術調査報告書を刊行した。

- 3 国際的な講演・研究集会を昨年度に引き続き、平成14年2月23日に中国及び韓国から専門の研究者を招聘し、国内からも第一線級の研究者を招いて約40人規模で開催した。活発な意見交換があり、有意義な集会となった。
- 4 文化財修理報告書刊行のための資料整理を行った。
- 5 館蔵品図版目録仏教絵画篇を刊行した館蔵品の絵画を110件収録しさらに銘文等の参考資料を付している。

4 教育普及

(1) 資料の収集と提供

購入・交換により、関連資料の受入を行った(1,545件)。

図書管理システムを導入して国立情報学研究所との接続を行い、それによる整理業務を開始した。館内各所から目録情報の検索が可能となった。

館蔵品及び館内で調査・撮影を行った文化財について、文字データ、画像データを作成し、文化財情報システムへの蓄積を行った。また、国宝の高精細画像を作成し、西新館1階の端末3台にて高精細画像の閲覧システムの運用を開始した。

仏教美術資料研究センターでのサービスを継続して行った(年間利用者数349人)。また、西新館1階に、美術書等を設置した一般向けの図書コーナーを設け(資料数311冊)、そこでのサービスを開始した。図書コーナーには利用者への案内のため、ボランティアガイドを配置した。

(2) 児童生徒を対象とした事業

「親と子の文化財教室」を平成5年度から実施しており、現地見学会や復元作業・体験的な学習内容により、受講者は楽しく学習できた。アンケート結果では、受講者の満足度は極めて高く(8割以上)、この教室に参加してよかったといった感想が多く聞かれた。また、アンケートの評価は、そのつど分析しながら、改善できるものはただちに対応した。

修学旅行・校外学習等の団体及びグループに対して、解説ボランティアが展示作品の解説や課題学習等の質問に適切に対応した。親切でわかりやすい解説であったとの高い評価を得た。特別展、特別陳列ごとに両面印刷1~2枚の小・中・高校生向けのわかりやすいクイズ形式のワークシートを作成した。児童生徒たちには大変好評であった。

(3) 講演会・友の会等

公開講座を11回、ギャラリートークを16回実施した。年間を通じての参加者数は、公開講座が約1,050名、ギャラリートークが1,100名と、これまでよりやや増加した。

夏季講座は平成13年7月17日から19日まで実施したが、設定時期の条件から、参加者数が昨年度より10パーセント少なかった。

講演会等の内容は、いずれも展覧会に関連したテーマを設定し、その趣旨にふさわしい講師の招聘をはかった。

友の会入会者は、2,709名であり、昨年までの会員数を上回った。また、友の会会員にも夏期講座参加を案内し、97名の参加を得た。

(4) 博物館・美術館関係者や修理技術関係者を対象とした研修

1名の研修生を受け入れ2ヶ月の研修期間中、研修日誌の記入と反省会を毎日設定し、充実した研修となるよう学芸課全体で指導にあたった。

(5) 公私立博物館・美術館等の展覧会の企画に対する援助・助言

「法隆寺展」(名古屋市松坂屋美術館)、「国宝唐招提寺展」(長野県信濃美術館、名古屋市博物館)、「聖徳太子展」(東京都美術館、大阪市立美術館、名古屋市博物館)等の展覧会について、出品作品の点検や梱包・展示返還等の助言を行った。

(6) 大学等との連携

大学等の要請により、博物館学芸員を志望する学生を対象に、昨年度より2大学5名多い17大学45名の実習生を受入れた。

放送大学の面接授業を年2回実施した。

奈良女子大学との連携講座(大学院生対象)を担当した。

(7) 事業成果の広報活動

1「博物館だより」を年4回発行し、来館者に無料配布するとともに、郵送希望など外部からの依頼にも対応した。

2 インターネットのホームページを作成し、展覧会情報等、博物館の各種活動の広報の充実を図った。平成13年度アクセス件数は昨年度約18万件を大幅に上回る約35万件であった。また、当館研究紀要のホームページでの公開に向けて準備を行った。

(8) 収蔵品等の文化財その他関連する事業のデジタル化

文化財情報システムへのデータの蓄積を継続して行った。

データ件数は、文化財情報約910件、写真情報約8,500件、画像データ2,000件の計11,410件となった。

(9) ボランティアの活用

ボランティア活動も6年目を迎え、今年度は約90名が活動した。活動内容もますます充実したものとなっており、来館者のアンケートからもわかりやすい解説と親切な対応に評判も上々であった。

(10) 企業との連携等

特別陳列「西大寺興正菩薩叡尊」では、飛鳥園の協賛を得て、ポスターを制作配布し、日本経済新聞社の後援も得た。また、特別陳列「手向山八幡宮と手搔会」では毎日新聞社

の後援を得て、展覧会カタログの充実を図った。

5 その他の入館者サービス

1 施設・環境整備委員会を設置し、高齢者・身体障害者等への配慮について検討を行った。

なお、当館ではバリアフリーを推進し、施設についてはハートビル法に全て対応している。

また、高齢者・身体障害者等に対しては、職員がきめ細かに対応し、館のリーフレットにエレベーター、身障者用トイレ及びスロープ等の表示を入れ、案内に努めた。

2 展示・サービス改善委員会及び施設・環境整備委員会を設置し、整備プログラムの策定について検討を行った。

施設、設備面では、館内表示の改善、傘立ての設置、ロッカーの増設、自動販売機の設置、ベビーベッドを設置したほか、西新館の空調設備の改修に着手した。

3 展示・サービス改善委員会を設け、モニター制度の導入について、検討を行った。

なお、数年前から観覧者に対しアンケートを実施しており、平成13年度においても平常展・特別展の両方において、館内数カ所にアンケートコーナーを設置し、観覧者の意見及び感想を聞き、平常展においては、80%以上、特別展においては、約90%の観覧者から満足したとの回答を得た。

なお、平成13年度は、観覧者の理解促進のため、以下の事業を実施した。

○解説ボランティアの導入

○音声ガイドによる作品解説（平成13年度から導入）

○関連イベントの実施

ギャラリートークや作品解説の実施。特別展と連動した公開講座や夏季講座（講演会も含む）の実施。

○特別展と連動したコンサートや茶会の実施

4 特別展等の企画実施に際し、外部の大学等の研究者にゲストキュレーター等を委嘱する等、積極的に専門的情報を収集し並びに指導助言を得た。

また、解説ボランティアからも、展覧会に関する意見や印象・感想等に関するレポートを求めた。

5 入館者への情報提供を積極的に推進し、サービスの向上を図るため、特別展「仏舎利と宝珠」展より音声ガイドを導入し、「ぶつぞう入門」や、ハイビジョンによる展示解説を行った。また、解説ボランティアからも、展覧会に関する意見や印象・感想等に関するレポートを求めた。

また、常設展示の英語表記について、本館コーナー解説については6月に、西新館各部門解説については12月に導入した。

6 従来より展示し、好評を博している「古代寺院遺跡地図」について、当時の寺院の実態について最新情報に改め、また、寺院の詳細が分かるよう点灯ランプの種類を増やしたほか、英文の概要を記すなどのリニューアルを行った。

7 小中学生を対象に陳列作品について、クイズ形式の解説冊子の無料配布を実施した。

8 平常展では、西新館1階の端末で名品紹介として解説情報を提供した。また陳列品一覧について、「奈良国立博物館だより」に掲載し、展覧会についての詳細な情報提供を図った。

9 解説ボランティアについては、作品解説のほか、図書コーナーにおいて入館者への学習アドバイスをを行った。

10 入館者のニーズを把握し、開館時間の弾力的運用を図り、毎週金曜日等を夜間開館日とし、午後5時の閉館を2時間延長し、午後7時まで開館した。

また、正倉院展では開館時間を拡張して9：00～18：00とした。

11 ミュージアムショップやレストランの施設充実を図るため、アンケートを実施した。その結果を踏まえ、清涼飲料水の自動販売機を2台設置し、コインロッカーの増設を行った。

【九州国立博物館(仮称)設立準備室】

1 新たな博物館運営への取り組み

(1) 九州国立博物館（仮称）の設置準備

4月1日に、東京国立博物館内に九州国立博物館（仮称）設立準備室を設置し、主幹として鷲塚泰光奈良国立博物館長を兼務発令した。

独立行政法人国立博物館本部において、事務・研究の両面を支援する体制を整え、九州国立博物館（仮称）の設立準備に係る業務を遂行した。

また、九州国立博物館（仮称）の設立準備に係る業務を遂行する上で、東京国立博物館からの多大なる協力を得て、庶務的・会計的な事務処理をはじめ各専門分野での検討・調査等を行うことができた。

(2) 常設展示業務

平成12年度に取りまとめられた展示の基本設計を実施設計の段階に進めるべく、映像ソフト作成の検討等をはじめとする各種プロジェクトを設置し、活発に検討を行い、平成14年度実施予定の展示実施設計に向けての基本的な資料を整えることができた。

(3) 博物館諸機能業務

九州国立博物館（仮称）の運営手法・管理手法等について、福岡県と一体的に実施するため、施設の維持管理をはじめとする運営費や人員配置計画等に係る諸問題を検討するとともに、その対応を協議した。

また、現在、九州国立博物館（仮称）の設置に当たって、支援活動を展開している財団法人九州国立博物館設置促進財団の将来的な支援方策等の在り方について、協議を行った。

教育普及・生涯学習、交流、高度情報化の各機能については、活発な検討を行った結果、基本計画をそれぞれ取りまとめることができた。

（３） 予算

収入は５，４８９百万円の予算額に対して、運営費交付金は４，６１２百万円、自己収入６９８百万円、施設費補助金１８４百万円、寄付金等収入３０百万円の合計５，５２４百万円の収入となった。

支出は５，４８９百万円の予算額に対して、運営費交付金は４，１４９百万円、自己収入は５６９百万円、施設費補助金は１８４百万円の合計４，９０２百万円の支出となった。

人件費は１，９７１百万円の予算に対して、１，８７９百万円の支出となった。

（４） 予短期借入金の限度額

借入れ実績なし（限度額は８億円）

（５） 重要な財産の処分等に関する計画

百年記念館（仮称）新営工事の関連工事として、焼却炉及び西塀を撤去した。

（６） 剰余金の使途

実績なし

施設・設備の整備に関する状況

京都国立博物館においては、百年記念館（仮称）新営の関連工事として、通用門改修、焼却炉廃止等、埋文調査整理保管庫取設、旧区役所前塀取設及び西塀撤去、旧区役所等の改修工事を予定したが、旧区役所等の改修工事は予期せぬ設計見直しの必要から工期の延長を余儀なくされ、平成１４年度へ繰越すこととなった。その他の工事については予定どおり竣工した。

事業成績及び財産の状況

期別	第１期
----	-----

区分	事業年度	第1事業年度
経常費用(千円)		4,095,207
経常収益(千円)		4,223,094
当期総利益(千円)		127,887
総資産(千円)		150,132,970
純資産(千円)		148,374,425
資金期末残高(千円)		1,125,510
行政サービス 実施コスト(千円)		7,100,978

II 国立博物館の概況（平成14年3月31日現在）

主要な事業内容

独立行政法人国立博物館（以下「国立博物館」という。）は、博物館を設置して、有形文化財（文化財保護法第2条第1項第1号に規定する有形文化財をいう。）を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、貴重な国民的財産である有形文化財の保存及び活用を図っている。

設置している博物館等

名称	所在地
本部事務局	東京都台東区
東京国立博物館	東京都台東区
京都国立博物館	京都府京都市東山区
奈良国立博物館	奈良県奈良市

*その他 九州国立博物館（仮称）を設置

政府による出資の状況

設立時に、土地、建物、構築物の合計71,562,881千円の出資を受ける。

主要な借入先

なし

職員の状況

国立博物館の職員の職種と定員の状況は、次のとおりである。

1. 職種

一般職	下記以外の業務に従事する者
技能・労務職	衛士等の監視、警備等の業務に従事する者 自動車運転手、車庫長等の業務に従事する者 機械手、電気手等の機器の操作、保守等の業務に従事する者
研究職	調査研究業務に従事する職員

2. 定員 211名

理事及び監事

理事長（兼東京国立博物館長）	野崎 弘
理事（京都国立博物館長）	興膳 宏
理事（奈良国立博物館長）	鷲塚 泰光
理事（東京国立博物館副館長）	西岡 康宏
監事（非常勤）	阿部 充夫(財団法人放送大学教育振興会理事長)
監事（非常勤）	篠原 啓慶（公認会計士）

III 自己点検全体評価

評価項目	評価の結果
事業活動	<p>独立法人化の初年度である平成13年度には、これまで以上に組織的に文化財の保管や教育普及事業の教育分野などに取り組んだが、これらの事業を始めとして、概ね年度計画で予定していた事業は目的どおり達成できた。今後は、これまで国立博物館の主たる観客である成人のみならず、児童・生徒、大学生などを含む国民各層に親しまれる博物館になるように取り組んでいくことが課題と考えている。</p>
収集・保管	<ul style="list-style-type: none"> ・購入については、3館とも収集方針に沿った作品を適切に入手できた。 ・寄贈は、東京国立博物館が国宝1件、重要文化財3件を含むおよそ140件という多数の作品を受け入れることができた。寄託品は購入と返却が13件あったため、目標を下回った。 <p>京都国立博物館は社寺調査の機会を寄託に結実するよう努力し6,135件を受け入れ、目標を達成した。</p> <p>奈良国立博物館は新規44件の寄託を受けるとともに、356件にもものぼる中国古代青銅器の受託を決定したことが特記される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保管及び修理については、3館とも目標どおり実施できた。
公衆への観覧	<ul style="list-style-type: none"> ・総入場者数は、目標を30万人上回る、約165万人であった。 ・常設展は3館とも展示活動の中心と考え、幅広い国民に関心を呼ぶよう、陳列替えや各種の特別陳列を行い、活性化に努めた。常設展の入場者数は東京と奈良は目標を上回っているが、京都は2万人下回った。これは、特別展・共催展（以下「特別展等」という。）の開催日数を増やしたことによるもので実質的な減少ではない（注）。 <p>（注）常設展の入場者数は、常設展の発券数で捉えており、特別展等の入場者が増えると、特別展の入場券で常設展も観られることから、常設展の発券数が減少するという結果になるので、平成14年度からは、「総入館者数」と「特別展等入場者数」で捉えることとした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別展等については、入場者数の目標を3館とも大きく上回った。特別展等の内容を各博物館ごとに見ると、東京の「横山大観展」、京都の「雪舟展」、奈良の「正倉院展」と、一般に広く知られたもので多数の入場者があったが、各館で実施した「自主企画展」は、内容の充実が図られているにもかかわらず、入場者は、目標を下回るものがあるなど、広報や展覧会の名称のつけ方などに今後の課題を残した。 ・海外に於いて実施した展覧会は、これまで以上に充実した内容で開催できた。スイスのリートベルグ美術館で「長谷川等伯展」、パリの日本文化会館で「はにわ展」を開催し、また、京都ではプラハの国立美術館ほかのコレクションによる日本美術展が行われた。 ・鹿児島、沖縄、和歌山、徳島で開催した博物館・美術館共同主催の地方巡回展を含め、国内各館への出品もこれまで以上に行った。

<p>調査研究</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中期計画、指標に基づいて、3館それぞれが、収蔵品や社寺等保有の文化財の調査研究、特別展に関する作品の調査研究、科学研究費等による特定課題に関わる調査研究を、国内外において積極的に実施した。また、国内外の博物館、美術館、大学等の研究施設の研究員を外国人招聘・客員研究員等の制度を活用して招聘し、共同研究やシンポジウムを行い、成果をあげることができた。 ・研究の成果は、研究紀要、図版目録、各種報告書、展覧会カタログなどにおいて公表した。日本・東洋古美術・考古の研究の国際的広がりに対応した国際学術交流の推進や、積極的に外部研究者の博物館事業への参加協力を求めること、財源の確保が今後の課題と考える。
<p>教育普及</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・独立行政法人化にともない3館ともこの分野の組織を拡充して活動の充実を図った。 ・教育にかかる活動の分野では、社会人や学生に対するギャラリートークや講演会は、これまでになく規模で実施した。聴衆の満足度は高く、参加者数も増加した。東京国立博物館では展覧会に関連した企画内容で「こどもミュージアム」を実施し、京都国立博物館では京都大学との連携講座を実施し、奈良国立博物館では「親と子の文化財教室」及び修学旅行生等を対象とした解説ボランティアを実施するなど、各館が個性的な活動に取り組んだ。 ・普及広報にかかる活動の分野では、国立博物館ニュースを、展示情報を中心としたものから、読み物として親しまれるものへとリニューアルした。 ・友の会については、年間いつでも入会できる方式に改めたが、会費の値上げや広報が不十分だったことから、奈良国立博物館を除いて会員数が減少した。今後、一段と柔軟な手続きとなるように工夫するとともに、広報に力を入れていきたい。 <p>ホームページによる広報は、内容の充実にもなってアクセスは増加している。とくに奈良国立博物館はほぼ倍増した。</p>
<p>その他の入館者サービス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・3館とも、国民の意見を十分聴いて、業務に可能な限り反映させる方針で臨んだ。展覧会や講演会開催時には観客へのアンケート調査を実施し、東京国立博物館ではホームページでも意見や感想を募集した。また、専門家の意見を聞くことも検討しているが、奈良国立博物館では研究者に展覧会の批評をお願いし、その内容を公開している。今後、国民の意見を、館の業務運営の向上にどのように反映させ、役立てていくか、その仕組みを構築することが課題であるが、既に、国民の意見や感想を参考にして、展覧会の混雑時に日除けのテントを設置したり、博物館の単独主催の展覧会でも、観覧券購入の待ち時間を少なくするため、前売券を発券したり、京都国立博物館の「雪舟展」や奈良国立博物館の「正倉院展」では、観客の実情に応じて、開館時間の延長や開館時間の変更を行い、サービスの向上に努めた。 ・各博物館ごとの取り組みに加えて、独立行政法人国立博物館として「運営委員会」と「外部評価委員会」を設置し、外部の専門家の意見を聞いて、運営に反映させることとした。 ・3館とも展覧会において積極的に音声ガイドを導入して、解説の充実に努めた。 ・図録については、研究成果の発表と言う側面では充実が進んでいるが、一般の観客からは、「大部で重い、価格が高い」との意見も見受けられた。今後、研究成果の発表という側面と啓発書の側面をどう調和させるかが課題である。

<p>業務運営</p>	<p>業務運営は、全般的に効率性のある運営に努めるべく、職員の意識改革を図りながら、事務事業の見直しを進め、初期の目標はほぼ達成した。しかし、施設設備については、博物館施設としての機能を保持する空調設備等の大型設備の改修等の課題が浮上し、その経費について、今後どのように充填していくか重要な課題として残った。</p>
<p>効率性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の事務の見直しを行い、本部事務局を設置した。本部事務局において、法人全般にかかる運営事務（役員会にかかる業務、外部評価の実施等）、予算要求、資金運用及び損害保険その他共通的な契約等の事務を一元化し、一括処理を行った。共済事務についても一元化し、東京国立博物館の会計課で処理するなど効率化を図った。 ・共通的な通知、お知らせ、事務連絡等、館内 LAN を十分に活用し、ペーパーレス化と効率化を図った。 ・講堂や茶室等の施設についても、積極的に利用案内を行い、施設の有効利用を図った。 ・「運営委員会」を設置し、外部有識者に法人の運営について意見をお聞きし、事業等の推進に反映させた。 ・職員についても、企業会計の導入に伴い、新たな会計事務に習熟させるため、機会を捉えては、研修を行った。 <p>既に、各方面で効率化を検討し、実践しているところであるが、今後共、更なる効率化を図ることとしている。</p>
<p>財務</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・収入面においては、年度計画の目標額 5 億 7 千万円に対し、7 億円を達成することができた。この剰余金約 1 億 3 千万円については、独立行政法人通則法第 4 4 条第 3 項に基づく目的積立金とし、法人化のメリットを最大限活用する。 ・支出面についても効率化目標が達成されたことから、運営費交付金債務約 4 億 6 千万円を翌年度へ繰越しし、博物館の展示環境の整備等に当てるものとする。 ・更に、外部資金の獲得については、寄付金約 3 千万円、科学研究費補助金 6 千万円の獲得に努めるとともに、今後の積極的な外部資金の獲得のための方策について、平成 1 3 年度中に種々検討を行い、平成 1 4 年度から行う新たな外部資金受入のための制度を設けることができた。 ・なお、博物館の収入の殆どを占める入場料収入については、企画展示の内容により左右されることが懸念されるため、運営費交付金については、中期目標・年度計画の達成内容に応じて安定的に措置されることが必要であると考えているので、このことについては、関係方面の理解を得るべく努力していくこととしている。

<p>人事</p>	<p>1 職員の計画的、適正な配置と人事交流の推進等</p> <p>独立行政法人移行に際しては、法人本部を設置した。また、東京国立博物館では資料部を廃止し、企画部を新設するなど、各館において既存の枠にとられない組織の再編や人事配置を行った。</p> <p>事務系の職員については、法人本部、各館とも大学等との人事交流を幅広く行っており、適材適所の人員の確保に努めているが、一方、人事交流の期限が3年となっており、業務に慣れた頃には大学等に戻ることでなくなり、通暁した専門性や研究系の職員との連携の点で欠点がある。</p> <p>研究系の職員については、公募により適材適所の人員の確保を行っている。</p> <p>なお、法人内の各館間の人事交流はほとんど行われておらず、今後法人の活性化の観点からも検討していくこととしている。</p> <p>2 事務能率の維持・増進</p> <p>福利厚生については、法人本部・各館において、職員の意見を聞きながら、各種レクレーションの実施や研修用の教材等の購入を図り、業務能率の向上に努めた。</p> <p>職員の能力開発をするため簿記研修、接客マナー研修など各種研修をとおして、職員の質的充実、意識改革を図った。</p> <p>3 人員に係る指標</p> <p>常勤職員の数については、中期計画の範囲内で適切に配置した。</p> <p>人件費については、平成13年度退職予定ではない2名の退職手当が見込まれていなかったため、その分年度計画の人件費見積額を超えることとなった。</p>
<p>施設</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・京都国立博物館においては、百年記念館（仮称）新営の関連工事として、通用門改修、焼却炉廃止等、埋文調査整理保管庫取設、旧区役所前塀取設及び西塀撤去、旧区役所等の改修工事を予定したが、旧区役所等の改修工事は予期せぬ設計見直しの必要から工期の延長を余儀なくされ、平成14年度へ繰越すこととなった。その他の工事については予定どおり竣工した。 ・奈良国立博物館では、文化財保存修理所が完成した。 <p>また、奈良国立博物館では、昭和47年に竣工した西新館の空調設備が耐用年数を大幅に経過し、他の事業予算を縮小して、運営費交付金により工事に着手した。</p>